
寒さ嫌いの氷魔術師

カフェイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寒さ嫌いの氷魔術師

【Nコード】

N8129Z

【作者名】

カフェイン

【あらすじ】

得意な系統が氷であるのに寒いのが嫌いというなんかずれた少年、氷村正人。

そのギャグみたいな人柄とは裏腹に重い過去を背負っている彼は、紅魔法学校でどのようにすごしていくのか。魔法が使える世界での学園ストーリー

プロローグ スベテノハジマリ

「はあ、はあ、はあ・・・」
自分の声も聞こえなくなるような豪雨の夜、少年は逃げていた。
幸いにも、この豪雨のおかげで足音も声もかき消されている。
決してあてがあつて走っているわけではなかった。

- 死にたくない -

その願いだけが少年の体を動かしていた。

いったいどれほどの時間を走り続けたのだろうか。

一時間、一分、一秒

迫りくる恐怖により時間の感覚さえ分からなくなってきていた。
どうしてこんなことになってしまったのだろうか。
つい数十分前までは、大好きな家族とともにいつもと変わらず過
していた。

父と、母と、幸せな時間を過ごしていたのだ。

あの黒服の奴らが来るまでは。

突然、家の玄関が物凄い音を立て、吹っ飛んだ。

父はこのあたりでは一番の魔術師であり、国直轄の魔法防衛軍の小
隊長だったので

一直線に玄関へ飛び出していった。
母は急いで少年をかつぎあげ二階の部屋に逃げ込んだ。
9歳の少年にはいったい何がおこったのかわからなく、
母に聞いても「私達がぜつたいに守るから、大丈夫よ」としか言わ
ない。
母がそういうなら大丈夫というなら大丈夫なのだろうと納得しよう
としたとき、

「我らはロミスオンだ！」

その声を聞いたときの母の顔は頭から離れない。
恐怖と絶望が入り混じったような顔をしていた。

それを聞いた後の母は少年に話すひまさえ与えないほど素早くを自
らの血で

魔法陣を書き、何らかの呪文を唱えはじめる。

すると、少年の足元にも同じ模様の魔法陣が現れ激しい光を放つ。

「いったい何がおこってるの!？」

ついに耐え切れず少年は母に問いかけた。

少し寂しそうな表情をしたが、すぐに微笑み

「これからあなたはつらい人生をいくことになるかもしれない。そ
れでも、決して

下を向かず歩き続けなさい。」

と言い、自分のつけていた十字架のついたネックレスを少年に渡し
た。

その時、部屋の扉が黒服の男たちによって破られた。

「じゃあね、必ず逃げて生き延びなさい」

それが最後に聞いた母の言葉だった。

あの黒服の男たちはいつたいなんだ

- ロミスオン - ってなんだ

そんなことを思いながら視界は真っ白に染められていった。

「ここは、外なのか」

さっきの魔法陣は移転魔法のものだったらしく、家の近くの公園に移転されていた。

しばらくの間呆然としていたが、すぐに走り出した。

母の言葉を思い出したからである。

少年の予想通りに遠くから「早くあのガキを捕まえる」という声が聞こえてくる。

少年はひたすら逃げた。どこへ、わからない。ただひたすら遠くへ。いったいこの先どうすればいいのか、わからない。何もわからない。

わかっていたのは逃げなければならない、それだけだった。

プロローグ スベテノハジマリ（後書き）

いきなりシリアスですいません。

どうも、どうも、カフエインと申します。

完走めざしてがんばります。

プロローグの後だけど・・・はじめに

どうも、この度初めて小説を投稿しましたカフェインと申します。
こんな新人ですがこれからも読んでいただけたら嬉しいです。

さて今回は「寒さ嫌いの氷魔術師」の舞台設定を書こうと思います。
どうも、自分の力量じゃ小説内ではうまくかけそうにないもので・・・
では、どうぞ。

舞台設定

この小説の主人公が暮らしている世界は簡単に言うと、魔法が存在するのだけが違いの日本の平行世界のようなものです。
なので、基本人の名前は漢字です。決して欧風の名前が思い浮かばなかったのではないですよ（焦）

魔法について

魔法は基本属性の、火炎、水氷、雷鳴、風雲、大地の五属性と光陽

と闇陰の特殊二属性

から成り立っており、五属性ならば努力しようと思えばすべての属性を使うことができる。

ただし、特殊二属性は片方しか使うことができない。

別に闇陰属性は禁忌などではない。

ほとんどの魔法は一行程度の詠唱を唱えるが、無詠唱やかなり長い詠唱を使うこともできる。

しかし、その分多くの魔力を消費する。

二つ同時に使うこともできるが（これを二重魔法デュアルマジックという）

やはりその分多くの魔力を消費する。

主人公、氷村正人ひむらまことについて

詳しいことはこれから書いていきますが、特徴的なのは・・・

- 1 冬、ていうか寒い嫌い
- 2 水氷属性が得意
- 3 基本Sかつっこみ担当

です。

これ以上はネタバレになるので・・・

学校について

紅魔法高等学校はで1〜12組までわかれている。

2・8組が火炎、3・9組が水氷・4・10組が雷鳴、5・11組が風雲・6・12組が大地を得意と

するクラスになっており、1・7組はすべての属性をある程度は使えるという組である。

各属性とも数字が低いクラスのほうがレベルが高い。

という感じですよ。

少しでも皆さんが楽しんでくれる小説を書くよう努力します。
それでは、本編で

新学期 まだ少し寒いこの頃

あれから7年過ぎたある朝

寒い季節の朝というのはほんとうにつらい。

起きなければならぬとわかっていながらも布団を離すことができない。

最近では少し暖かくなってきたのだが、朝はやはり寒い。

「・・・・・・・・・・いつ、・・・・・・・・く・・・・・・・・る」

もとより寒いのが嫌いな俺、氷村正人にとって、自分からこの布団エの中からでるのはかなりつらかった。

はあ、新学期なんてほとんどなにもしないようなもんだから10時ぐらいに登校だったらしいのに

「はや・・・・・・・・・・言って・・・・・・・・遅れ・・・・・・・・」

そうだ、どうせ宿題を提出するぐらいだから10時でも問題ないじゃない。

ほら、寝る子は育って言うし。絶対おそいほうがいいって。

「いいかげ・・・・・・・・きる・・・・・・・・最しゅ・・・・・・・・く・・・・・・・・」

そつえば、さっきから周りがつるさいな。

人が気持ちよく寝てるときになんだってんだよ。
はあ、そろそろ起きるか・・・

と思い顔を上げると

目の前にピシッドロシッピをくわせおじつしている姉がいた。

「まだ腹が痛え・・・」

そう言いながら、パンを食べる。ちなみに、俺はなににもつけないのが好きだ。

バターとかジャムとか意味わからん。

「あんたが起きないのが悪いんでしょうが」

そう言いつつパンをたべるのは俺の1つ上の姉の氷村葉月。

ちなみに、パンにはチョコレートクリームを塗っている。

っていうか姉よ、あんたは弟が起きなかつたらヒップドロップをしますのか

年頃の女がなにやってんだよ

「正人は昔から寒いのが苦手だからなあ」

と、父の氷村賢治がのんびりつぶやく。

父さん・・・そんなことより、まず姉さんの暴挙はスルーなのか。

「いやー、なんだかんだと言っていつも通りだからなあ」

・・・ちよつとまで。いろいろとつつこみたいが俺は言葉に出した覚えはないんだが。

心をよんだのか？

「もー、ちゃんと叱らなければだめでしょ、あなた」

そう言いながら次々と皿を素早く洗うのが母の氷村奏。

母さんは比較的常識人なんだけど、いろいろと人外なんだよな・

えっ、どんなところが人外だった？

あそこで残像ができるくらいのスピードで皿を洗いながら喋ってるのを見るとわかるよな

もう気づいてる人もいるかもしれないけど、表記が姉さん、父さん、

母さん、と」義」という文字がついてないのだ。

7年前、正人の本当の両親の平木直人と平木彩音は死んだ。
いや、殺された。

あの豪雨の夜、ついに力尽きた正人は路上で倒れてしまった。

その倒れたところが、この氷村家の前だったのだ。

次に目を覚ましたのが氷村家のソファの上だった。
ここがどこかもわからず困惑していると、

「おっ、目が覚めたみたいだな」
とのんびりした口調で話しかけてきた。

「……」は

「氷村家だ。ついでにいうと俺は氷村家頭首の氷村賢治だ、なんつってな」

今思えば、あれは俺が話しやすいようにする気遣いだったのだろう。

「家のまえで倒れてたけど、なにかあったのか」
正人は何も言わなかった、いや言えなかった。

「言えない、か。家族はどうした」
そう聞かれてはつとした。

思い出したのだ、あの夜の出来事を。

こらえきれず、すすり泣きながら
「たぶん………殺……された」
と言つと

「何っ………そうか、嫌なこと思い出させてごめんな」
と言つて正人の頭を撫でた。
とても優しい手だった。
正人は泣いた。ただただ叫ぶように泣いた。
賢治は何も言わず頭を撫で続けていた。

しばらく泣いた後、賢治は

「お前、どこか行くあてはあるのか」と聞いてきた。

もちろん9歳の正人に行くあてなんか知るはずもなく首を横に振るしかなかった。

すると、次には驚くべき言葉が返ってきた。

「よし、じゃあ俺と家族になろう」

意味が分からないと思ったのが本音だ。それもそのはず、あつて数分しかしてない見ず知らずの男にいきなり家族になろうと言われても驚くだけだ。

「……どういう意味」

「そのままの意味だ、戸籍上、養子ってことになるが気にしなくていいぞ」

「そういう意味じゃないつ。どうして会ったばかりの子どもにそんなことを言っ」

正人はつい叫んだ。

「困ってる人がいれば手を差し伸べれる人になりなさい、ってのが俺の父のことばでね
俺はそれをじっこうしているだけだ。もっとも今度は規模がちがうけどな」

言葉が出なかった。

同時に偽りの優しさではなく、本当に心から優しい人なんだと理解した。

「で、家族に家族になるのか、ならないのか」と微笑みながら聞いてくる。

「でも、いいのか、僕みたいな知らない人を家族になんて」

「さっきからいっていつてんだろ」

心が揺らぐ。

「でも、あなたの母さんや子どもには迷惑じゃないの」

「そんなこと説明すればいいだけじゃねえか」

また心が揺らぐ。

「でもっ・・・僕、寒い嫌いだし、朝とか起きられないよ」

「面白いやつだな、お前。朝ぐらい起こしてやるよ」

そして優しく

「これからは俺がおまえの父さんになってやるよ」
と言った。

我慢できずついに飛びついてしまった。

こついつ感じて俺は氷村正人となりこの家族の一員となった。

みんな、本当の家族のように接してくれるので俺は義父さん、義母さんとは呼ばないのだ。

やべっ、いろいろ思い出してるうちにもうこんな時間になっちゃった。
急がないとまずいかもな。

急いで用意を済ませ俺は学校へと急いだ。

再会 久しぶりの親友たち

学校に入るともう大半の生徒が登校していた。

みんな春休みにどこへ行ったとか、何してたとかいろいろ話している。

春休みね、寒くてあまり動く気にはなれなかったけどな。

まあ、冬休みよりは良かったが。

と、そんなことを考えていると

「正人、何考えこんでるんだい」

「別になんでもねーよ。春休みは寒かったなーって思い返してただけだ。」

「正人らしいね。僕はどっちかっていうと暑いのは苦手なんだけどな」

と、にこやかに話しかけてくる男がいた。

こいつは橋野俊介^{はしのしゅんすけ}去年、一緒の3組にいた俺の親友だ。

「で、正人はちゃんと水氷属性以外の魔法も練習してきた？」

「当然だろ、去年いつしよに1組に上がるって約束したからな」

そういえば、クラス替えのことはまだ話してなかったな。

クラス替えてっていうのは、新学期と十月頃に行われるんだけど、なかなかハードなテストなんだよな。

たしか、筆記、各属性の魔法レベル、特殊二属性の強さ、体力・精神力・魔力測定、あと、戦闘考査だったっけな。

最初の4つは全部1日で終わらせる楽なほうなんだけど、戦闘考査はそれだけで1日を使うかなり大がかりなテストなんだよな。

一応この学校に入学する時にみんな魔法防護服を作ったんだけど、それでもダメージを完全にまではふせげないんだよな。

ちなみに去年の10月のクラス替えでは、俺は火炎のつよさが合格基準にいかなく、俊介は雷鳴の強さが足りなくて3組になったんだ。魔法を使い始めの頃はなんで火炎が使えないのかわからず、大泣きしていたのはいい思い出だ。

「やつほー、正人。俊介くーん。」

「よう、光。相変わらず元気だな」

「おはよう光さん、ほんとに元気だね」

「だって私は元気なのが取り柄だから」

と、元気よく話しかけてきたのは、自他ともに認める元気っ娘藤田ふじたひ光だ。かる

光も俊介と同じ3組の親友だ。

ちなみに、元気なその性格と可憐な容姿から男子からの人気はとても高い。

すでに、何回も告白されているらしい。

前に何度か俺や俊介とかがいるとにラブレターを渡していたやつもいたんだけど、なぜか光は困ったような顔してこっちを見てきたんだよな。

俺には見てほしくなかったのか？

「正人も俊介君もテスト大丈夫そう」

「ああ、今度こそは1組にあがってやる」

「そうだね、春休みに結構練習したから1組いけると思うよ。」

「二人ともさすがだね。私はやっぱり風雲属性が苦手で厳しいかも」

「大丈夫だって。3人一緒に1組に行くって言ったら、テストは明日からだし今日一緒に練習しようぜ」

「なにより、光さんは正人がいればだいじょうぶだしね（ボソッ）」

「っ……//」

と、俊介が言うのと光の顔は真っ赤に染まっていった。

聞こえなかったが俊介は何を言ったんだ？

そんなこんなで時間は過ぎていき・・・

- 始業式のの時間になりました生徒の皆さんは15分後に体育館に集まってください -

と、放送が流れた。

「そろそろ時間だな。行こうぜ俊介、光。」

「そうだね、遅れたらいろいろ面倒くさいから」

「はやく行こ。正人、俊介君」

「あゝ長かった」

いくらなんでも長すぎだろ。校長なんて同じところ4回も話してたぞ。

途中で貧血で倒れた生徒がいたのに構わず話し続けてたのは俊介でさえ驚いてたよな。

あの校長、若いときは爆炎の獅子とか呼ばれてたらしいけどほんとかなあ

まあ、この学校の校長やってるぐらいだから凄いなとは思っけど。

「流石に私もつかれたよ。俊介君は平気なの」

そう、もつとも不思議なのが俊介のやつが貧血くんがでる以外は顔色一つ変えずに聞いてたことだ。
いったいどんな体のつくりしてんだよ。

「まあ、長かったけど全然大丈夫だよ。」

と、相変わらずさわやかに答える俊介。
ほんとに大丈夫そうだな。嘘を言ってるようにも見えないし。

「まあこれで今日の学校も終わりだし、はやく魔法の練習しようぜ。」

「僕はやめとくよ。今日、家に誰もいないんだ」

「そうか、じゃあ今日は二人だけだな、光」

「う、うん、そうだね／＼」

こうして、俺と光は7時ぐらいまで魔法の練習をすることにした。
また顔真っ赤だったけど光のやつ大丈夫なのか。

クラス替え 1日目

クラス替え試験1日目

「おはよう正人。」
登校していると光が話しかけてきた。

「おはよう、光。調子はどうだ？」

「昨日、正人に教えてもらったから大丈夫だよ。あの後、部屋でこし練習したら、かなり使えるようになったよ。いす壊しちゃったけど。」

「いや、部屋の中で風の魔法使いなよ！使うなら外ですればよかったですかねーか」
ときどき、光は天然になるんだよな。そんなもって、へんなところで頑固にもなるし。

そんなことを喋りながら歩いているといつの間にか学校についていた。

「おーい正人、光さん、掲示板に筆記の教室と今日の時間割が書いて

「であるから見にいこう」

「わかった。光、行くぞ」

「うん」

俺たち3人は名前が「ひむら」、「はしの」、「ふじた」と名前が近いので3人とも同じ教室でうけることになっていた。

「えつとなになに、9時30分まで筆記で、それから昼までに各属性のレベルと特殊2属性のレベルか。」

「昼からは体力・精神力・魔力を測るんだね」

「筆記以外は僕たちみんなバラバラになっちゃってるな。12時30分に屋上で待ち合わせして昼ご飯食べないか？」

「それがいいな。じゃあまずは、筆記早く終わらせようぜ」

「ああ(うん)」「」

第一門 基本五属性をすべて答えなさい。

簡単だな。答えは、火炎、水氷、雷鳴、風雲、大地、と
案外楽だな。しばらくはこんな問題が続くのか・・・

おっ、少し難しくなってきた。

台二十四問 水氷属性の利点を二つ書け

俺にとっては簡単なんだよな。状況に応じて”水や氷にかたちを変
えることができる”と、”ほかの属性より比較的消費魔力が少ない
”かな。

このあたりから少しずつ難しくなってきたな・・・

これで最後か・・

第四十問 この学校の校長の名前を書け。

・・・・・やばい、思い出せない。

えっと・・・なんだったっけ。だめだ全く出てこねえ。

もういいや爆炎の獅子って書いとけば部分点はもらえるだろ。

筆記試験終了

「正人、俊介君、できた？」

「僕はそこそこかな。最後の問題がわからなかったけど。」

「俊介もか、俺も最後の問題がわからなかったよ。光は？」

「私もわからなかった。いったいどんななまえなんだろうね」

結局、校長の名前はわからずじまいであった。

ほかの生徒たちも、どうやらわかってないみたいだ。

あの問題答えたの何人いるんだろうな。

各属性のレベルでは、俺たち3人とも苦手な属性も問題なし、とまではないがよかった。

一つ気になったのが、俺は光陽属性がとても高くなっていると言われたことだ。

戦闘審査さえよければ1組には余裕で入れるだろうとも言われた。

そして、1日目終了した。

クラス替え 1日目(後書き)

終始グダグダでごめんなさい。
切に文才がほしいです

クラス替え 2日目 (前書き)

やっとちゃんとした魔法が出せます。

違和感なく書けてるかどうかわかりませんがどうぞ見てやってください。

クラス替え 2日目

その日の夜

クラス替え試験一日目も無事に終わり、正人は家で明日の戦闘考査のために部屋で筋トレをしていた。
あのような事件になっても身を守るように、正人は普段から筋トレをしている。

が、明日は大事なテストのため、普段より回数を多くしている。

「97・・・98・・・99・・・100!、腕立て100回終わりごと。次は腹筋を、」

腹筋をし始めようとしたとき、

「正人、入るよ」

と、姉の葉月が入ってきた。

「どうしたんだよ姉さん。俺、今筋トレ中なんだけど」

「いや、我が愚弟の今日の結果を聞きたくてね」

「フン、どうせ俺は姉さんみたいに満点とかとれないですよーだ」

ちなみに、言い忘れていたが姉さんも紅魔法学校に通っていて、次で三年生になる。

しかも、成績優秀、運動神経抜群ときた。

一番得意な属性は風雲でもちろん1組にいた。どうせ次も1組だろう。

家で弟にヒップドロップかます人が1組なんていまだに信じられないが・・・

「今回は私満点じゃないわよ。一つだけわからなかった問題あったし」

「珍しいな、姉さんにわからない問題があったなんて。何がわからなかったんだ」

「あれよ、最後の校長の名前書けてやつ」

姉さんでもわからなかったのか・・・ 本当にあの問題とけた人いるんだろうな？

本当に全員不正解じゃないかと思えてきたぞ・・・

「そうだ、明日の戦闘考査のためにちよつと組み手でもしない」

「いいぜ。今日こそ姉さんから一本とつてやるよ」

「まっ、ちよつとは期待しとくわ。先に庭にいるから」

と言って姉さんは部屋から出て行った。

俺と姉さんの戦績は俺の全敗。

光陽魔法で強化した突きや蹴りの威力はハンパない（もちろん、俺も使っているがそれ以上の威力）

毎回、最後には俺が地に伏せてるんだよな。

「よし、今日は一本取りますか」

自分に喝を入れて俺も庭へ向かった。

「正人、そのほっぺどうしたの？」

「真っ赤だね。葉月さんと組み手でもしたんじゃないのかい」

「俊介、正解。風使ってスピード上げた突きを打たれた。」

わかってると思うが、結果はまた俺の負け。

今回はいいとこまでいったんだけどなあ。

姉さんの体勢が崩れたと思い、おもいきり蹴りを放ったら軽々つかまれて、さっきの隙はわざとなんだと理解したとたん、風で体を浮かせられ一気に殴られた。

「そろそろ時間だよ。後でヒールしてあげるから今は我慢してね。」

「頼むわ、光。この顔で試合なんてしたら間違いなく相手に笑われるだろうからな」

戦闘考査は一人に三回の試合があり、その試合での結果だけではなく、内容も問われる。

つまり、負けてもいい試合をしていれば好評価をもらえるのだ。

逆に勝つても力任せなどの何も考えない行動とかは減点対象となる。

俺は先生からの一通りの説明を聞いてから光にヒールで治してもらい、三人とも一回戦の会場が別々のところだったので別れた。自分の会場に行き試合表を見てみると。

「俺の相手は・・・げっ、三回戦で俊介とかよ。」

なんと、三回戦の相手が俊介だった。しかし、俺はワクワクしていた。

「これは負けらんねえなあ」

俺は一回戦も二回戦も余裕で勝ち、（どうやら、俊介も光も全勝しているようだ）三回戦へと臨んだ

そして三回戦・・・

「各自、魔法防護服は大丈夫だね」
審判が確認する。

「俊介、手加減はなしだぜ」

「僕だって負けるつもりはないよ」

「二人とも、がんばって」
遠くから光の音がする。

「では、構えて………始めっ！」

先手は俺が取った。

「まずは……我が手に宿れ氷河の剣！」
手に氷の剣を出現させ一気に俊介につっこむ。

「（速いっ）くっ、風よ」

俊介は短い詠唱で空中に回避した。

俊介のやつ、風雲属性はあまり得意じゃなかったはずなのに。

「こんどはこちらからいくよ。焼き尽くせ」

俊介は空から大きな炎を出してきた。

「荒れ狂うは怒涛の吹雪」

両手を突き出して力を込める。

「スノウウェイブ
雪の津波」

俺の一番の得意技だ。

冷気の波動が俊介の炎を打消し突き抜けていく。
氷が俊介を包み込んだ、と思ったがそこに俊介はいなかった。

「さすがだね、でもこれなら……」

俊介はすでに地上にいており、右手を構え、左手でそれを支えてい

た。

まさか、あの瞬間に風を使って降りてきたのか。
なんて奴だよ。

「貫くは爆炎の流水、矛盾するものよ一つとなりて敵を滅せよ」
まさか、デュアルマジック二重魔法

一気に決めにかかるつもりか。
これはまずい……

「水炎の大槍！」

ものすごい音を立て、こちらに迫ってくる火炎を纏った水の槍。

ドガアアアアン

これまたものすごい音がたち正人の近くは煙に包まれた。

「やったか……」

俊介は動けない。煙のせいで動けないのだ。

「今のは……危なかったぜ」

煙の中から正人の声が聞こえた。

俊介は流石に驚いた。

いくら正人でもアレを受ければ無事では済まないと思ったからだ。

「ど、どつって」

「簡単だ。まずは自分のまわりを熱で覆い、さらにそのまわりの温度を急激に下げたんだ。一瞬とはいえ流石に一度に火炎、水氷、大地の三つの属性を使うのはきつかったが」

温度差で爆風をうけながしたのか。水は急激に冷やされ、さらに摩擦で擦り減っていったのだろう。

だが、正人はもうボロボロのはず。ここで僕が決めれば・・・

「風よ雪よ、今我に集いその者を凍てつかせよ」

正人が詠唱をとなえているだつて！

しかも二重魔法！
デュアルマジック

まてよ・・・風と氷、そうか。

すでに、この空気を支配していたんだね。

やっぱり正人にはかなわないなあ。

エターナルブリザード
「永久吹雪」

俊介の意識はそこで途切れた。

クラス替え 2日目 (後書き)

ちなみに正人は二年生です。

詳しい戦闘のことは次に書きます。

クラス替え 2日目続 光の戦い

正人は必死だった。

俊介の放った「水炎の大槍」は氷の壁を作った程度じゃ、防げそうになかったのだ。

(しかたねえ……)

まず、正人はあたり一帯を得意の水氷魔法で冷やし(かなり戸惑ったが)、2mほどまえに氷を張った大地の壁を出現させる。

水炎の大槍は水の部分を氷らせ、摩擦により表面を少し削っていた。

しかし、完全に削ることはできず、勢いを残したまま壁に衝突……
・・する直前に、正人の周囲の温度を一気にあげる。

こうすることにより、温度差で気流が変化し技の衝撃をそらしたのだが、完全にはそらせなかった。

しかし、直撃よりはましであったために倒れることを防いだ。

次に正人は、爆発によってできた気流と、技が壁に衝突したときに舞った氷の粒を一気に集め、エターナルブリザード永久吹雪を放ったのだ。

この技は、大量の魔力を使わなければ放てないのだが、壁に張らせておいた氷と、氷った水炎の大槍の衝突によって大量の氷の粒が舞い散り、さらに爆発によって風が起こったので、少ない魔力で放つことができた。

しかし、他にも大量の魔力を使い、苦手な寒気に長い時間触れてい
たため、

「よし……なんと……か勝つ……」

ドサッ

勝利したものの、正人も倒れてしまった。

ここは、紅魔法高等学校、臨時保健室。
戦闘考査の日は、けが人が続出するため、通常の保健室だけでは治

療が追い付かず、別の場所に治療施設を作る必要があった。
ここは、そのための場所だ。
ちなみに、体育館を丸ごと使っている。

「……………ん、ここは、」

「おはよう、正人。ここは臨時保健室だよ」

「そうか、確か魔力の使い過ぎでぶっ倒れたんだっけ。結果は。」

「君の勝ちだよ。あんな技使っとしてよく言うよ」

「お前のだつて危なかったじゃん」

どうやら、魔力もそこそこは回復しているらしい。
よく見れば、医療スタッフが50人ぐらいもいる。
俺は30分程倒れていたらしい。

案外眠ってなかったな。

「正人、そろそろ光さんの試合が始まるよ。見に行かなきゃ」

と、俊介があわてたように言う。
もうそんな時間だったのか。早く見に行つてやらねえと。

「よし、早く見に行くか。体は大丈夫か？」

「僕は大丈夫だよ、正人のほうがまずいんじゃない」

「まだ少し冷えるが大丈夫だ」

と、笑いあいながら、光の観戦へと向かった。

俺たちがつくと、ちょうど始まる直前だった。

「どつやら、ギリギリ間に合ったらしいね」

「ああ、なんとかかな。それで相手は誰だ？」

「あれは……去年の4組の須藤星姫さんだね」

四組の須藤か、確か去年、4組」で学級委員やってたって聞いたことがあるな。

4つてことは雷鳴か……

光はどう対処するんだろうな。

「では、構えて……始め！」

先手は、須藤が取った。

「貫け！、はああああ」

5本の雷の矢が光に向かって飛んで行った。

光はそれを風を使い飛んでよけた。

光のやつ、風雲属性うまくなってるじゃないか。

「銃魔法！撃ち出すは灼熱の散弾」

出た、光の銃魔法。

光の魔法は魔法具の双銃に自らの魔力を込めて撃ち出すという遠距離系の魔法だ

あとは、撃ち出す弾の属性と種類（光線や放射型など）を決めて撃ち出すだけだ。

須藤もそれを時には避け、時には打ち消しながら光に突貫していった。

「銃ならば、接近戦は苦手なはずですよね」
「言い右手は雷、を左手には炎を纏い接近戦に持ち込んだ。
確かに普通ならそうなんだが、光は違うんだな。
光の双銃の凄いところだよ。」

「弾変更^{リロード}、撃ち出すは冷気と熱波の放射」

「・・・っっ！」

光は銃から50〜80?ほどの小さな放射弾を出し、刀のようにして須藤の打撃を防いでいる。
これが光の凄いところだよ。
遠距離オンリーじゃなく、弱点である接近戦の専用の技もあるという臨機応変なところだ。
しばらく接近戦が続いたのち。

「厄介ですね、その銃」

しびれをきらした須藤が風を使い一気に距離を開け、

「雷鳴轟き、空を裂きなさい。雷撃^{ボルトアロー}の弓！」
巨大な電撃の弓矢を出現させ、放つ。
かなりの威力だ。くらったらひとたまりもないぞ。

「爆風よ、われに力を」
二重魔法^{デュアルマジック}によって、火力をつけた風の弾を斜め後ろに撃ち出し、光は斜め前へ勢いよく飛び技を避けた。
そして、その勢いそのまま相手に近づき、押し倒し、額に銃口を突き

付け、

「私の勝ちね」

と、宣言した。

「降参です。とても強いですね」

須藤の宣言により、光の勝ちが確定した。

試験終了 打ち上げみたいなもの

光の試合が終わり、俺と俊介は光に会いに行こうとしていた。

「光のやつ、銃の扱い上達してたなあ」

「ほんとにね。特に最後の後ろに撃つて前に飛び出す技はびっくりしたよ」

「あんな使い方するとは普通思わないよな」

「そうだね。あつ、光さんだよ」

「それと、横にいるのは、須藤か」

光は須藤と喋りながら歩いていた。

どうやら、あの試合の後に仲良くなったらしい。

光はすぐに誰とでも仲良くなるんだよなあ。

「あつ、正人。私の試合どうだった。」

「凄かったぞ。そっちの須藤、だっけ、流星は元4組の委員長だっただけあって雷鳴の強さは一級品だな」

「僕は雷鳴が苦手だから、余計にそう思ったよ」

「ありがとうございます。でも光ちゃんやあなたたちに比べたらま

だまだですよ。あと、私のことは星姫でいいですよ。そのほうが呼ばれ慣れてますし」

「そうか。なら俺も正人でいいぜ」

「僕も俊介でいいよ」

案外、星姫は話しかけやすいやつだった。

元委員長って聞いたからカタブツな人かと思ったけど、全然ちがうな。

どっちかっていうと、おしとやかかって感じかな。

こうしてクラス替え試験は終わった。

どうやら、結果は明日に発表されるみたいだ。

こんなに生徒がいるのによく一日でまとめられるよな。

ちよっとこの学校に関心。

「最後に、今回の試験の結果は明日校舎に張り出すので、明日はそれを見て自分の教室に行くように」

いまだに名前がわからない校長の話が終わり、解散となった。

「やっとクラス替え試験終わったなあ。そうだみんな、どっかで遊ばないか」

「いいね。僕もそんな気分だよ」

「私も行く。星姫ちゃんもいく？」

「私もいいんですか！ぜひ行きたいです」

でも、どこで遊ぶかなあ

いまは3時30分で微妙だし。

他にいくあてもないしなあ

そんな感じで、遊ぶ場所について悩んでいると。

「僕は久しぶりに正人の家にいつてみたいな」

「それいいね。私も一度も行ったことないから行ってみたいかも」

「正人さんの家ですか、楽しそうです」

そういえば前に俊介が俺の家に来たのって11月ぐらいだった。光は一度も来たことないし、星姫はさっき知り合ったばかりだしな。

そうだな、母さんにも今日のこと知らせたいしそれでいいか。

しばらく、考えた後、

「そうだな、じゃあ俺ん家に行くか」

ということで、氷村家に行くこととなった。

場所は変わり氷村家

「ただいま母さん、友達入れるよ」

「おかえり正人、あら、俊介君じゃない、久しぶりね」

「お久しぶりです」

「ゆっくりして行ってね。あら、そちらの娘たちは」

「藤田光です。よろしくお願いします」

「私は須藤星姫です。よろしく願いします」

「二人とも礼儀正しいわね。正人も見習いなさいよ」

「なんで俺なんだよ。リビングでいいよな」

「ええ、ジュースとか取ってくるから、案内した後手伝ってちょうだい」

「了解です。じゃあ、入ってくれ」

「「「おじゃまします」「」」

正人は荷物を置いた後、二回に上がっていった。

「ここが正人さんの家ですか。そういえば俊介君は何回か来たことがあるんですよ」

「うん、5、6回あるよ。一年の初めの時からの仲だからね」

「私も一年の夏休みの前ぐらいから一緒にいたけど、ここに来たことはなかったなあ」

「高校生で家で遊ぶ機会ってあまりないですからね」

「遊べる日はカラオケとか行ってたもんな。ほい、ジュース」

いつの間にか、正人と母の奏はジュースとグラスを持って降りてきていた。

奏の手には皿に盛られたたくさんのお菓子がある。

「それで、今日の試験はどうだったの」

「俺は何とか俊介に勝ったよ。最後は二人とも倒れちまったけどな」

「私は光ちゃんに惨敗でした。私はまだまだですよ。」

「そんなことないよ。星姫ちゃんの電撃すごかったよ。あれなら、1組に入れるよ」

「そうだね。4人全員で1組に入れたらいいよね」

「そうだな。せつかく星姫とも仲良くなったんだし、4人一緒に1組入りたいよな。」

筆記もまあまあだったし大丈夫だとは思っただけだなあ。

「ただいま」

ん、姉さんが帰ってきたみたいだ。
なんか、うるさくなりそうだな。

「おっ、俊介に光ちゃんじゃん。いらっしやい」

「お久しぶりです葉月さん」

「おじゃましています。」

「まあ、ゆっくりしていきなよ。で、そっちの子は？」

「あつ、わ、私は須藤星姫です。氷村センパイ、よろしく願います」

「ははは、そんな固くならなくてもいいし、葉月でいいよ。よろしくね星姫ちゃん。それにしても正人、家に女の子つれこむとは、いいご身分だねえ」

「じぶんに勇気がないからってってひがむなよ（ボソッ）」

その後、正人の意識は刈り取られていた。

ほとんど聞こえないような声で言ったはずなのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8129z/>

寒さ嫌いの氷魔術師

2011年12月30日02時50分発行